震災の記憶

最良の結果を信じ、最悪に備える

相馬市の風光明媚な景勝地・松川浦までわずか数メートルという場所に位置する「みなと保育園」。子どもたちのお昼寝中に発生した長く強い揺れの中、職員は園児の安否確認を何度も行い、一人もけが人を出すことなく避難することができました。

職員の冷静・的確な指示で子どもたちも迅速に避難できた

当日は約190人が登園しており、150人ほどはすぐに迎えに来た保護者に帰すことができました。しかし、その後大津波警報が発令され、いつ、どんな大きさの津波が来るかも分からないまま、できるだけ高い所へと、残った園児を園舎の屋根に避難させることを決断。脚立をはしごにし、0、1歳児は職員が背負って、その他の園児は自分で屋根へ上りました。園児と約30人の職員、近隣の住民も加わり約100人が屋根の上で2時間ほど過ごした後、近くの公民館へ歩いて避難、さらに市の手配したバスで中学校へと移動しました。混乱の中、全ての園児が保護者と会えたのは翌日の朝のことでした。

「日頃から月2回避難訓練を行っていましたが、津波は想定していなかったですね」と園長の和田信寿（わだのぶとし）さん。子どもたちは、寒さの中でも泣いたり騒いだりすることもなく、職員の指示に従ったことが驚きでしたと話します。

安心して子どもを預けられるよう万が一に備えての準備は万端に

震災後には「最良の結果を信じ、最悪に備える」をモットーに、避難用はしごを4台設置。さらに全園児・職員分の防災ずきん、避難用のベビーカー、非常用飲料水などを備えました。保護者には、大津波警報が発令された場合の避難経路をまとめて配布し、万が一の場合にも冷静に対応できるように周知しています。

また、少しでも安心して子供を預けてもらえるようにと、園舎内外の放射線量を毎日測定・掲示しています。「今でも全国からたくさんの支援をいただき、心の傷は痛いけど、涙で流し笑いで飛ばせ、と頑張っています」と和田園長。園舎内に響く子どもたちの元気な声が、一番の復興の源になっているようです。

▲和田園長（後列中央）と園児・職員

▲震災後に準備した防災ずきんと避難用ベビーカー

◀避難用はしごとモニタリングポストも設置

募集しています

県では、東日本大震災の体験、記録、記憶、教訓などを募集しています。
県歴史資料館（電話 024-534-9220）まで情報をお寄せください。
いただいた情報については、あらためて日程を調整し、記録などの収集に伺います。

寄附金の活用状況と義援金の配分状況

国内外の皆さまの温かいご支援に、心より感謝申し上げます。

寄附金の受入実績（6月末現在）　86億4千万円（2,818件）

県に寄せられた寄附金は、災害の復旧・復興のための財源として活用しています。

おもな使途
- サテライト校（被災校の臨時校舎）の運営費用
- 仮設住宅の環境改善
- 交通手段の無い被災生徒の通学支援
- 原子力災害による風評被害対策

問／県庁生活環境総務課　☎024-521-7669

義援金の受入・配分状況（6月末現在）

県や国（日本赤十字社など）に寄せられた義援金は、市町村を通じて被災者の皆さまに、順次お届けしています。配分基準は市町村で決定していますので、詳しくは、被災時にお住まいだった市町村にお問い合わせください。

受入額	市町村への配分額	被災者への配分済額
●福島県義援金　200億2千万円	●福島県義援金　187億7千万円	●福島県義援金　168億5千万円
●国（日赤など）義援金1,226億1千万円	●国（日赤など）義援金1,190億4千万円	●国（日赤など）義援金1,060億1千万円

※住居被害の認定作業は現在も続けられており、新たに受け取る方にお届けするため、県及び市町村では一部義援金を留保しています。
今後、住居被害の認定作業の進捗（しんちょく）状況などに応じ、配分します。

問／県庁社会福祉課　☎024-521-7322

読者からのお便り　震災の記憶を読んで、頑張ろうという若者のエネルギーが伝わってきた。笑顔の写真が多く掲載されており、読んでいて気持ちが良かったです。（古殿町 60 代男性）